



仮面を脱ぐ旅

At Last, Simply Human

永田円了

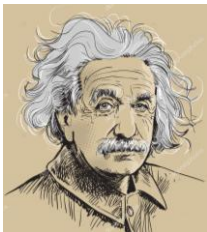
私たちは皆、何らかの仮面をつけて生きている。教師は「先生」という仮面をつけ、医師は「医者」という仮面をつけ、親は「親」という仮面をつける。社会の中で生きる以上、それは必要なことでもある。もし誰もが四六時中、むき出しの感情だけで生きれば、社会はなりたたない。だから仮面そのものが悪いわけではない。

心理学者ユングは、この社会的な顔を「ペルソナ」と呼んだ。ペルソナとは本来、社会に適合するための仮面である。つまり私たちは皆、社会という舞台上、それぞれの役割を演じているのである。しかし問題は、その仮面を長くつけすぎることにある。いつしか人は、「先生」であることと、「自分自身」であることを混同し始める。「立派な先生」でいなければならない。「強い人」でなければならない。「失敗してはいけない」。そうして役割を守ろうとするうちに、人は少しずつ、仮面の内側にいる“**本当の自分**”を見失っていく。だが人生のある時、人は気づく。仮面だけでは、人は深くつながれない、と。



教育の現場でも、これはしばしば起こる。知識を教えるだけなら、AIでもできる時代になった。しかし、生徒の心を本当に動かす教師とは、単に「正しいことを言う人」ではない。不完全でありながら、一人の人間として自分の前に立っているひとである。NHKのETV特集「先生が変わる、学校を変える」の中でも、印象的だったのは、教師が「管理する人」から、「共に悩み、共に生きる人」へ変わっていく姿だった。教師が完璧な仮面を少し下したとき、教室の空気が変わる。子供たちは驚くほど敏感に、「この先生は本当に自分を見ているか」を感じ取っている。

映画『レナードの朝』においても、それは同じであった。ロビン・ウィリアムズ演じる医師は、最初は「患者を治療する医者」としてレナードに接していた。しかし次第に、彼自身がレナードとの出会いによって変わっていく。それは「医師が患者を救った」という物語ではない。一人の人間が、別の人間との出会いによって目覚めていく物語なのである。



**人は自分自身から抜け出すことができるようになった時、
生き始める(アインシュタイン)**

人は、その役割によってかわるのではない。存在そのものによって変わる。考えてみれば、私たちが人生の中で忘れられない人とは、「肩書きの立派な人」ではないであろう。むしろ、自分一人を人間として見てくれた人、自分の弱さや痛みに静かに寄り添ってく

れた人ではなかろうか。

人間は、「完成された人格」によって結ばれるのではなく、「傷をもった存在」として結ばれていくのではない。だから本当に必要なのは、「仮面を捨てる」ことではなく、仮面の奥にいる“ほんとうの自分”に気付くこと。社会の中で役割を果たしながらも、その奥に、生身の自分が息づいていることを忘れない。そして相手の奥にもまた、役割ではない、一人の孤独な存在がいることを。その時、その時にこそ、人間関係は変わり始める。教師と生徒ではなく、人と人として、医師と患者ではなく、人と人として、親と子ではなく、人と人として。

仮面の時代を生きる私たちに、今ほんとうに必要なのは、「もっと立派な仮面」ではない。仮面の奥にいる素の自分自身と出会い直すことかもしれない。

<事例>

ETV 特集「先生が変わる、学校を変える」2026/5/14
ユング、ペルソナ／素の自分はペルソナの後ろ側にいる
米映画『レナードの朝』Awakenings 実話を基に描かれたドラマ
朝日新聞コラム「思い込みの罫」永田円了 2015/2/4
歌・ダイアナ・ロス「It's My Turn」私の番

円了のホームページ: www.enryo.jp

